



新局玉石童子訓
五

1279
20



1279
20

新編 玉童童子訓卷之三上冊

東都 曲亭主人人口授編



第二十五回

陰徳陽報如如来極と導く
積善天感落葉其實と賜ふ

再説十三屋九四郎ハ當日杜四郎成勝ハ絶て久し治比の信弘元風濕病
臥のり且教訓の言の顛末又贈れ金子の支音就基綱の上又言詳小傳
示して弘元の授る一書と取出て遍與る杜四郎ハ今始て知る父の疾病痛
母の逝去大兄貞元親子の早逝支母胸没れて漫小涙の進む覺は其
書と屢羨戴たて歎息あつ且の思ひ治比ハ不幸かの如くあるハ斯
の女もあつて啣言多似れども俺薄命の致し所歎長命歳々と嘗母力目
喪ひよ幾程も外祖又母と世と去て今ハ安んずる親弟兄ハ會まらばとの

玉童童子訓卷之三上冊

思ひ小大兄の命長かど況や大人の疾病臥ぬと云くから速る身と化ゆるも
縦去向の幾百里雲と水と隔るも一番舟の便り求む。瞬間小彼御許へ参る并
見せぬもあら後悔を思ふも何とぞ及ん然らぬがういふは御教訓の重なる。今一
人の功みて那里へ参りながら悲しむると聲立て泣ぬ位に増る孝子の心思ひ
汲九四郎さそと慰め其御歎の理りから大人の欠安の大病るね療薬必経
験ありて竟る瘥りぬる人路費の金も賜りたる其毛の權且思ひ復て来を
わて東の方の武者修めぬ。大人の教も侍る吉支る後の見参安かどと云ふ
乙其執も云々と詞を添て諫れ四郎の僅小點頭て現行は行も従も親の教も従
ふと孝子の道とのいれぬ。這一通の俺兄の代筆也大人の賜書と兼ま今見
参の心地をまるいそくといひゆも又其一書と戴て封皮を拆きある折る是然
とて外面より這方と投て来る者ありと見れば一個の老若の年齢六十近と

かみらば衣己の時夏衣まららぬ装の貧からる打扮も婦子の前帯裳
短多副帯さ精悍い後方帛せの轆子の轆丈両名従ふて十三屋の店前へ来
は暖簾と瞻仰見て這里けりと單領く老若荒余の揖讓くと卒介さ向は
り九四郎主宿所在と云と四郎見えと折牙から父の書と并ぐ儘懐夾せ
急身と起りて避て奥へ退りける。當下乙其執の端近く件の老若と立迎て那里より
軟知るゆれと訪せぬ九四郎へ西へ旅宿の日數歴て今日から多て宿所在り櫛の御
用やいと問復されて嬉やる饒ぬと徐す草履と其里小脱措て赤登れ九四郎
も訝りまら膝と找めて訪せぬ屋主人十三屋九四郎の咱も小をひるれ什麼那里
より来りると訝り問へ點頭ても面善ゆゆるぬ地押やあけるもあつたか
たく思れぬ奴家の旦那小這御宿所在りと云ふや大和の旅客末朱之介小由縁の
上市る落葉小ゆりと名告小敬馬く九四郎乙其執思ひかけるを开いよくと其里の

了端近也。御話説と所傳ふ宜からば且這方へと右ひらり。上坐へ請居る。二枚
 折る。小屏風と建て片象る客儲ふ。藝の店舗の火盤盛る。真鍮鑿鑿拵
 試て温茶汲合る。蒲茶碗茶托尋てうち載て卒とをろふ。鷹が受戴れり
 備置て。原来御身の九四郎主の所對偶。藝云刀自れり。然とられて。藝の
 あり。おつ。即奴家。おれ。幾の程。知られ。故。と。あ。と。訝。九四郎
 俱。酒家の今朝。旅より還。そ。人傳。御身の。夏。彼。朱。刀。祢。幾。番。飲
 救。ひ。ひ。慈。愛。良。善。及。び。く。と。思。ひ。の。今。日。俺。家。小。末。生。え。と。の。神。る。ぬ
 身の。知。る。と。の。落。葉。の。又。點。頭。て。開。其。該。で。ゆ。奴。家。と。這。頭。ま。出。て
 來。ご。思。ひ。の。近。曾。御。身。の。宿。ま。ぬ。朱。之。女。の。俺。女。婿。ま。り。ひ。ひ。ぬ。る。さ
 浮。薄。の。本。性。を。知。ら。ぬ。小。末。わ。ら。ぬ。も。己。か。情。由。あ。り。當。春。東。西。と。買。せ。ん。と。
 京師の。遺。志。小。夏。蘭。る。ま。か。る。多。遊。真。の。癖。又。起。り。て。那。金。子。と。ぬ。り。り。

喪。い。や。ま。つ。と。猜。考。の。大。和。の。家。も。慨。然。と。言。う。ち。歎。死。の。在。り。け。程。
 い。ぬ。目。浪。速。の。陣。館。より。御。使。と。下。さ。れ。て。猛。可。の。奴。家。と。召。せ。ぬ。思。ひ。け。る。と。ら。れ。ら。ち
 敬。馬。に。乘。る。朱。之。女。の。一。之。圍。守。も。告。れ。れ。守。り。も。亦。御。下。知。あ。れ。等。一。等。の
 時。誼。あ。ら。む。留。守。の。故。老。隣。人。の。老。實。る。小。末。在。ら。せ。て。其。次。日。の。早。日。村。長
 刀。祢。俱。せ。ら。れ。て。上。市。の。家。と。立。立。り。一。日。二。日。と。旅。宿。ま。り。炎。暑。小。堪。ぬ。今。日。午。の。時
 候。俱。小。浪。速。小。末。ま。け。れ。鮎。て。陣。館。へ。参。上。り。ま。し。局。の。内。へ。召。よ。せ。ら。れ。て。頭。の。殿。職。善。御
 出。坐。在。り。有。司。小。讀。せ。て。せ。せ。あ。朱。之。女。が。越。度。の。條。々。其。願。未。と。創。て。知。り。ぬ。朱。之。女。の
 這。十。三。屋。と。宿。小。一。て。在。り。ま。日。今。様。と。歎。喚。做。る。娼。妓。の。自。殺。小。支。起。り。と。那。身。の
 ち。え。宿。の。内。室。に。藝。刀。自。乾。乾。見。達。兩。三。名。鼓。系。累。せ。ら。れ。て。久。く。獄。舎。小。敷。系。れ。小
 九。四。郎。主。の。舍。弟。る。勇。少。年。の。拵。死。て。鐵。屑。と。歎。騙。賊。の。下。の。夜。盜。と。兩。名。を
 捕。捕。ぬ。か。其。強。盜。の。招。了。て。今。様。が。自。殺。も。知。ら。れ。又。朱。之。女。も。九。四。郎。主。も

鐵屑が支黨るる証も其里小達一が頭の御疑消解て刀自と兩個の乾見達の
今朝共侶小赦小あて宿所小還りのひひ開が中朱之の舊悪多あつてもこの
時既小あえが更小罪と被ると大和へ返され背と二百鞭せて東へ追放せらるる
まて其條々小備るる有司達讀果る時頭の殿宣ふを落葉休が慈善る俺
間謀見とて豫且小知りこれ小召とせり別異小あはる量裏小朱之小盤纏
りと九四郎小預けと九百九十五金小朱之小が有財るは小沙金と唐
布と買えと朱之小小通與る金子る故小没官せ小返取る但一其金
故二百兩とける五兩小朱之小路次の小使減しうとのひひ這をもち存せよ
とみづら仰渡さそて件の金子と賜りく感まつも畏さふ一兩時退りて長刀小
加印の兼書とまわし母一が事立地小着落しと身の暇と賜り於是初と知り
ける刀自達三名の冤屈の罪小俺女背朱之小所以一俺身料らと這地小來る

宿所と訪ふて勸解もせと朱之小房錢の債もあらを償て大和へ還りけるれや
と思ふと村長刀小告て浪速小宿投て一兩時這身の暇と請を吊せり轡小
乗りつ方僅這頭へ来てすけ九四郎主の今朝安藝云よりから來ませると人との誨ふ
便すかたねばこそ推参まゆりおと告る詞の定る流る汗も納れり夕風よりも
凜々と思ふと執心とある僅小少知る御身の誠心違さ一も不思議の對面俺們
三人の罪饒されて世間廣くるる小那人なる追放されて往方も知らざるるひひを心
苦しく思ひの救ふくもあらと九四郎推禁めて落葉が實美を謝て
中初俺朱刀小家小留り故あると那人の俺隣る岸松屋と宿おせん左
界より來おけふ其岸松屋他郷へ徙りて這地小あらを做一か左界の人と約束を
る宿違ひて便すとのらふらちも置れと其隣る故とて只得俺家小留りて知
又那百九十五金の酒家安藝へ赴く折朱刀小預とて藝小藏置せり幾程も

福更起りて件の金子を陣館へ召されて出處と鞠向あり故の主るれとて御身返賜
 市四摠等と一旦連累せられりとも怨む死とあらば那人の心術好もあれやあれ俺
 俺誠心とて權且家小留りふ在暫や那人追放せられて鯉一文の盤纏もなれと救
 俠者ふあまと思ひければ俺弟末六とて金五両と贈らせんとて軒せりるれども時の程
 及及及や否と知れ又那二賊と生拘りより遂小疑獄と解り梓江の弟末六の功を
 去方小一個の勇少年あり開杜四郎成勝と喚做て末六と共侶小松の孟林寺小寓居
 志御向小訪来て奥小在りとのひ々外面瞻仰見て日と名没て黄昏とて乙藝藝の燈を
 出さるや喃大和の姨のふれも夢の如くも送小猶多かる今宵の這里小留らせぬといふ
 乙藝藝も共侶小留守の程る福事と櫛工も炊爨又一個もあらむ做りか自然
 せる款待のゆるねども先夕饌とまわらせ陝くあれと納戸とて夜と共小語りぬかか

のうと直と被敷て否剛才末身路で物喫れ欲る然るもうち續く憂
 ぞ疼のま治る自由はれれも夕風と吹入。這里小の儘置れとて下管待
 多され。ふ九四郎諾て介の兩個の轎夫の背門の酒飲せとて落葉の
 夢更否他は浪速の宿所返て今宵の情由を村長刀袷告す不使わぬ
 べ。このうや身と起り店頭立出てもと喚せられ店舗の備は轎と早屋
 主と俵件の兩個の轎奴と心と合て来りけと落葉の猶も近づて奴家の這里所
 要あり一夜明と明日と和郎連浪速の宿退りて由と長刀袷告て明日又朝
 風奴家を迎來よかと詞急迫く吟吟九四郎も勞て和郎連大受あらん
 へ酒菜のたけれ酒の背門より入て喫せとて轎奴も早屋を
 るれ欲から飯も剛才賜り本然と阿懐さる明日又迎ふありと告別を
 轎を拾起り浪速る。歇店と投て退りける當下九四郎の外は暖簾御

推買宣へ相招牌ふち乗て升が儘店舗の片隅遠く合入れて戸を繰下を両三枚
 都て困ぬ夏の夜の風も馳走の一蒸熱乙藝の燈引提多て碟子小装做の葛
 の粉餅小旗砂糖の夏の霜心も解け歎待態小煎茶の出餌級更て何のされ
 と是とも御口取中と薦るを落垂れ受の敷立てあちち措せぬまで御院會不
 做りゆり這葛餅子を賜ふ吉野の近江の家のまを思ひ出されて常言の言を
 逆旅のそと涙暗む庖偏の蚊遣煙の多て人を泣き袖の露夜の席の蕭然の因談
 時と程まあら姑且して九四郎の半々落垂れ向て前中をひひとささ杜四郎と未
 六が御身の上と少知りいゝる上市へ赴て那百九十五両の金さの出処来歴を問ひ質して
 自他一件の疑獄と解へ為る程を森林寺へ新参る柿公と喚做王奴隷の故郷の上
 市へと少そふ他不就て朱刃秘の出処の虚実を問ひ那人の放蕩を頼御身の落善
 徳美も具少少知るを以て俱大和起行せんを準備とせける其夜又疑獄と解く

免照据とゆれば大和倉を做りける不反て御身小訪る縁ある所以候も奇と云ふ
 落垂れ胆向ふ心の裏お思ふうち出て介のいふ品越を波濤飲振歌難涙の
 答口籠でけり有倦る折る竊歩を這店頭へ来る者あり是則別人をむ未朱
 之众晴賢之他い昔悪の故りて御堂陣館の雑兵二三名追立られたる去られ
 浪速の申明亭也升が儘小追放されて雑兵等ながら去りけり介程小朱之众罪解
 屍人を免れられも既追放の身と做りて僅小錢一緡の盤纏とあるとるけれ進退
 其里小合らてゆれもゆらま路傍の樹下小立よりて跪居て肚裏お思ふる皇義の俺
 冤屈の罪あて宿の老婆乾見等又一旦獄舎小敷糸れれも俺做せる許すおあられ況や
 他等小饒されて異る家小返されれ俺を憐敗思ひもとも死に死のあわれ九四郎の
 安井執下よりてのまかへ来むおれ老婆女執執お悲と請て錢を金まれ借らんと
 尋思をま路を見易て執て返る浪速を過る住吉の里小来ぬ程小既小七日暮

けり。當下朱之次、甲夜闇紛れ、十三屋の店頭、潜きて閉送たる戸の向より、家内の
 光景を覗み思ひ、さうける九四郎、何の程か、あつて乙藝と、俱小店舗、在り奇
 けり。又只是のころ、大和の落葉、主人夫婦、うち對ひて打譚、ありか、吐
 嗟と、心かり胆泣れて、憂多きま、と思ひ、内小入る、便宜なる、情と退れて、呼門せま
 猶も、容子と、知ま欲さ、店舗の傍、拾遺子と、情地下と、柱、身を倚せ、尻
 うち、拭て、草面、あつ耳と、澄と、王客、うち相譚、を、竊聞、を居、うける、裏面、あつ是を
 知る、より、ゆる、落葉、の、屢、嗟嘆、まで、九四郎、あつ答、る、入、り、入、る、朱之次、の、禍、更、故、不
 尚、年少、に、刀、袷、達、の、近、も、あつ、俺、家、と、訪、ん、と、ま、で、准、備、あ、つ、心、操、を、憑、一、れ、斯、い、つ
 暗、恥、と、明、々、地、不、做、ま、似、れ、と、朱之次、の、ま、い、も、柿、八、と、や、ら、が、話、説、を、知、れ、一、つ、隠、も
 要、る、他、の、俺、姪、斧、柄、の、必、死、と、極、て、妖、怪、を、對、治、する、者、り、且、奴、家、が、伊、勢、の、阿
 濃、の、津、の、遺、嫁、し、て、商、賈、の、妻、し、時、其、家、痛、く、衰、果、て、丈、婦、離、別、あ、つ、折、其、年

僅小五歳、獨女、見、泣、別、と、舊、里、る、れ、大、和、の、兄、仙、木、斧、七、家、小、飲、り、て、在、り、
 程、斧、七、夫、婦、の、時、疫、也、共、侶、小、身、故、り、遠、る、煙、の、斧、柄、の、其、比、尚、維、り、と、稍、守
 音、長、と、成、て、好、女、婿、欲、得、と、徴、る、折、り、朱之次、が、斧、柄、を、極、び、思、ひ、あ、つ、の、ま、り、他、の
 俺、故、の、良、人、の、後、妻、の、生、る、獨、子、る、を、守、り、新、恩、舊、縁、兩、方、深、く、感、思、
 今、の、故、小、漫、小、斧、柄、と、妻、甘、り、斧、柄、の、遂、小、有、身、て、五、月、小、做、一、今、茲、の、春、朱之次、の、東
 西、買、せ、ん、と、京、人、遣、たり、ける、久、く、る、ま、を、あ、つ、來、信、と、あ、つ、あ、つ、と、み、れ、斧、柄、を、
 苦、小、病、故、也、と、臨、月、小、做、ら、る、小、猛、可、小、産、の、紐、解、り、て、八、月、子、を、生、り、其、生、り、と、
 男、兒、也、然、り、も、恙、い、る、け、れ、も、只、痛、し、斧、柄、の、命、其、夜、急、瘧、也、身、故、り、
 來、守、り、育、る、姪、也、あ、れ、と、実、子、小、異、る、を、思、老、者、身、の、頼、む、樹、下、小、雨、漏、り、と、袖、を、
 衣、愛、の、言、愛、小、堪、ね、共、侶、小、死、な、り、と、ち、歎、れ、一、日、二、日、と、辨、り、も、安、葬、也、甘、
 あり、程、小、思、ひ、り、る、如、來、様、の、六、田、の、斧、と、出、ゆ、と、這、頭、と、養、縁、也、あ、つ、と、

人々く俺門の立集ふと云々其慌惑心より走り去り禪師様の御法衣の袖に掛り
斧柄が為の廻向と願ひまうり一か姑且錫杖駐りて俺家の三立よりぬいて斧柄が
柩の廻向あり且奴家の論をやら約其生とて活る物那生あれ這死の裏され
ゆると云へ何ぞ哀そ何ぞ歎ん俺今音量の法語あり善女謹んで聴聞せよ汝を
ゆゑ死しける女兒も其心貞實也悪心悪行るといふ不幸かかぬ如くも俱前
業報の今今之悪報あらされ死し清果とゆゑの如く又汝の女婿未朱之介の如
其原是邪物の後の身縁觸事小感と斧柄が必死と極しは是は薛子の寓る所
其極の極ふあり及て是と殺せ之然るを汝が疎忽る初對面より誓做の約
束し悔も甘風く斧柄を妻せて他が邪淫を喪ひて主君の財貨を喪はせとて
借得させし惑心の三救心も亦も欲して邪物の惡と肥赤其益を今今を
知り然る朱之介の齋したる二百金も空花也生れ小兒も孫らぬと後悟るるやん

然りとせと果敢るとは僧お做のま欲まるも這家の之西騎お做りて今の本意と
遂かたり好も歹にも自然に任して哀じくは歎くべし只愛惜の念と断て斧柄が
とてとせと教化一人町寧中の告ぎる俺家おありと見る如く知せぬ善
知識の法語お敬馬に且畏て合掌を尊まを罪深り迷の雲も御教化より
齊けり然る中も朱之介の齋したる金三裏の斧柄が厄と救れり報恩の其一種
也他又遊血淫樂お使失いこれをも惜み不足らぬれも他が東の主君より仰せ
来ける唐布百反と沙金五百兩ととて開の禪師おとまる造佛の為りて他淫
樂お使捨て残る沙金二十包留り俺家お在り他倘那儘お這地かてお做り
件の沙金と遣かる其折禪師様のて受さるぬと願へ頭とち掉て告げ
是有漏の縁扇谷の情願と許さばりて這故をれも汝が深信切義賞を
其沙金柩お乗て斧柄が亡骸と俱お瘞め其金後お世お見れて為る佛像と作る者

わらん然ハ扇谷朝貞の夙願ノ果キ足るベ。必る疑ヒト。論ラ料紙硯と求セ。則
 斧柄ガ法名ト梅雪信女ト命トあり。件ノ沙金ト出サセ。財囊ノ隨ハ柩ノ上ハ細ノ
 結付キ。又教ぬ。俺思ハ首われ。這亡骸ハ六田川ノ邊ニ拾ハキ。俺庵近ク
 葬ルベ。是モ縁あるコトナリ。四下ト見タリ。老弱百十數名。禪師ノ湯仲
 老弱者。俱ハ這坐席ハ稠入リ。圍繞シテ在リ。禪師列々看且。衆人目今俺急
 這柩ト拾ハ出シ。六田川ノ邊ニ葬ル疾々セ。トモガ。里人歎ビ羨ガ者ナク。
 惴雄ノ壮仗五六名。合肩入テ拾ハ出セ。柩ハ從。里ノ老弱皆後レ。トモ外ハ禪
 師ハ錫杖衝鳴シ。是ヲ導シ。憶リ。野邊送。奴家ハ。一家見
 不測ノ佛縁。哉。如來様ト信ス者。腹黒。毎十遍百遍誦。とも。拜面。饒
 去。豫。折。招。取。合。里。の。衆

人ハ柩ヲ舁セ。去リ。六田川ノ上。御庵ノ傍。安葬セ。過世。ハ。洪
 福。歎。歎。中。の。歎。最。淡。々。に。女子。の。浅。智。量。知。死。り。も。活。菩。薩。の。教
 化。任。せ。形。貌。ハ。有。長。髪。の。優。婆。姨。也。寧。煩。惱。の。絆。を。断。て。心。を。安。養。極。樂。淨
 土。置。何。を。措。ざ。ら。ん。思。ひ。復。多。歎。歎。を。禁。て。今。ハ。斧。柄。ガ。像。見。赤。子。ノ。為。乳。と
 討。小。片。山。里。ハ。巫。の。所。用。小。妹。母。ト。徴。易。カ。折。新。町。多。敗。鍊。經。紀。釘。六。の。老。婆
 也。二。日。已。前。小。子。ト。生。ル。小。其。赤。子。ハ。亡。り。て。懷。寂。哀。の。乳。房。盈。て。堪。不。可。
 離。鷓。を。索。ひ。と。啼。え。先。當。分。の。凌。の。為。斧。柄。ガ。赤。子。の。乳。名。ト。玉。五。郎。ト。命。け。て。
 釘。六。許。遣。し。其。老。婆。小。字。育。老。れ。聊。心。安。堵。是。も。の。後。梅。雪。信。女。の。為。香。と
 焼。花。ト。贈。け。看。經。小。日。送。る。程。多。三。七。日。あ。る。さ。り。け。當。日。浪。速。の。陣。館。も。石
 ろ。と。穿。え。く。う。ち。散。馬。は。喪。服。を。脱。て。這。地。ハ。來。つ。る。夏。の。顛。末。長。々。ト。飽。れ。や。と。ん
 要。死。身。上。話。説。ふ。こ。と。の。果。て。歎。息。九。四。郎。乙。藝。ハ。共。侶。あ。ま。哀。れ。人。の。家。

艱々今ゆら慰難て屢嗟嘆あつける。當下落葉の項下獄する。奴と返考財主を
 きて主人夫婦示しとて申す。前中も告するのまがら。這箇金二百兩の朱之奴の為調達
 他も遞與あり開が内中と五兩他使ひの。残る二百九十五金。這財主の中あり。今日
 陣館より賜りて故へ復し金子をさう。嬉しと思ふ。せかへん心似む。いづれも知るはる
 ぐ。朱之奴が醸する禍鬼お拘りて。己誓刀自三乾見連之疑獄お敷糸れひ。御
 活業は禁められ。東西の没女の言りけん。然ると朱之奴と憎とも。世他お盤纏と取
 荒も賢弟とて趕せぬ。九四郎主の任使の有か。荒も此の報をせむ。あぶ
 這地へ来る甲斐ある。願ふ御夫婦。這金子と受納て。是まの弗買お充させぬか。との
 財主と合抗て。遞與も欲する。九四郎もふたお觸ぎ。推戻しと且申す。開し思ひ
 ける。其金受て何せん。御身を朱刀。祿の幾層の鈔を渡れる。那人都て。夏をた遂
 び。開が上お令愛の不幸の没女もさあ。ん其の其儘で。か。て。佛事お用ひ。ひ。終と

推受め。己誓刀。俱ふ。如如来様の。の。い。も。這。里。中。の。人。の。者。有。其。活。佛。の。引。接。と
 美あり。御息女様の孝順貞義と御身の慈善の故。おと。あ。え。む。ら。の。其。余。及。ぶ。ら
 あらね。九四郎が任使する。人。お。東。西。と。施。い。ま。れ。然。る。は。故。人。さ。る。東。西。と。受。は
 り。ゆ。ら。開。と。云。と。強。い。憚。り。さ。ら。人。を。知。り。ぬ。故。を。偽。り。め。と。辯。ふ。と。落。葉。推
 復して。其。該。で。ゆ。れ。も。目。今。い。情。由。な。れ。枉。て。受。さ。せ。ぬ。と。又。申。す。と。毫。も。不
 久。夫。婦。一。固。辭。の。遣。り。返。り。果。一。さ。け。れ。落。葉。の。只。得。件。の。財。主。を。開。し。儘。倒。し
 閣。下。に。憶。お。落。る。感。涙。と。袖。お。握。り。て。又。い。申。す。思。ふ。増。て。誠。ある。御。夫。婦。の。方。正。さ。し。復。て。本
 意。を。ゆ。か。斯。ら。心。裏。恥。し。た。不。回。語。お。ゆ。れ。も。這。金。子。と。有。餘。游。財。出。ら。む
 か。朱。之。奴。を。世。お。さ。ま。思。ふ。と。内。百。兩。他。借。し。て。他。も。遞。與。あり。も。亦。空。お。做
 可。く。切。て。御。身。御。夫。婦。と。舍。弟。達。二。柱。の。恩。義。お。報。ひ。ま。ら。ん。と。思。ふ。と。の。寸。志。お。ゆ。れ
 開。も。听。れ。ぬ。と。争。何。へ。せ。ん。知。せ。ぬ。と。さ。ら。奴。家。が。伊。勢。の。律。お。在。り。時。故。の。良。人。本。偶

其の家も子も忘るまで色不惑ひて錢財湯水の如く使捨る其後妻小生
せとの朱之由父不似て似るを悲しけれ是れ就ても思ひぬる奴家が實の單女兒
乙袖の僅小五歳の時生別と二十稔有餘絶て信有り一近曾朱之が話説老劍
めて歩知る他が薄命名小夏と歎喚更られて継母のふ小養れ華の洛陽の身
杪枯の果敢る世渡りあて在り小親の京師に住托け乙袖が九歳なり秋男女西個
の子と携て夫婦鎌倉赴道中捐鍼山巔と踰る折山家小撞見て木偶女主命を
喪ひ乙袖の小夏の谷底へ投棄られて陽炎の命空く做りけと夢折胸泣れて哀
さ涯のるるける遮莫其折朱之の年三秋るれ夏の光景と覚ねども年圓て母親
阿夏の夜話少しと告られれが實るべし其哀悼袖濡てま乾ぬる谷柄まら命
短く子との遺して先られたれ千萬の金ありとも何かせん寄処る這老の身慰め
せ御夫婦達情強やとむる小憶む財囊と投捨てと泣伏沈め九四郎の身を

又絶て黙然と開が程乙藝の涙雨の如く同し浮世の笠宿り夕立天のあられも
曇や胸小思ふのわらまれと悲しさと歎けし濡る袖と絞もあま身と倚せ落
葉が井と拈下し又拈下しと喃御懷様今宣せ緋の趣俺身小思ひ合まるとあり御
身の故の對偶の伊勢の阿濃る町人老木偶女主と宣ひ其屋號の末松とて
袖の小夏の奴家小侍りと名告るる落葉の故馬にから頭と拾けて左見右見て原来
其方の俺女兒乙袖一飲えられも他の九歳なり一時冤家の為小十郎の谷投落
されいと歩る小世子存命であるべしやあるがごとと訝れ九四郎然と膝と找め
其疑ひの理の俺身總角より比二親小少いとありと言言くとも詳小告て御身は
惑ひと解ん抑俺父之ける安峯張九四藏中原通世の原是信濃の一諸侯本曾氏の家
臣なり小壯年の時故ありて致仕して宅眷と推乃て浪速小程来くと居る兵法武
藝と人小教て左も右もしてあける程永正九年八月の時候舊里小要事ありて一僕と



八四

九四

あつ

十二

十二

十二



朱之

あつ

悲位小副り
て落葉財
囊を擲

十二

十二

將て山峯張の岐嶺路を赴る。其比搦鐵嶺の折々山賊の禍ありとゆえんがま奈ら武
 藝を足る元自謹慎其身を愛する故に敢危を近つて其往々折中還るる中件の高嶺と
 上下せし案内知らる上され樵夫の通ふと山脚路を分入りて荆棘を踏踏溪水を渉し
 辛くしかり來る程日既傾れ比前面より東向一個の僧あり。頭中檜笠を戴
 きて背の駝做を網代の發る錫杖を携る。其形容飄々然とて面色も亦凡るを其鳥の
 細路相譲んとて仍過ると俟程件の僧歩と停りて俺父向ひて云。這里より西るる
 溪松の邊に賊難危窮の童女あり。他和殿親子の過世ありて必娘を成る。死者を今勉て那
 死を救ふ。後不幸なからん是を用ひて死に起しねと説示。懐より合少を一貼の藥を與て
 答と俟ぎ飄然とて仍過けり思ひするにこれ俺父の奇異の思ひと做さる然りとて
 疑のぞゆと一所有餘ありと見れば老翁の跋松の溪水の上指さる。木杖の夾れて死し
 如た一個の童女あり。足るべしと思ふぞ伴當と共侶の腔の濡ると數とさうな近つて

見れば那身小瘳い。ぞと推揚て抱合る。昔の処へ退りて草と折布に臥せり。先四下と
 見らる。其頭小寃家のありと。又其童女とよく見る。年八九おどあるべからん。敗る袴の
 夾衣と壺折て藍染る。仁田山紬の帯に申時どろろと。端短の結做して。腕被足
 小脚絆。小形の草鞋を穿され。旅ゆく賤女さべしと猜せり。形貌を斯に窺れたる容
 顔醜からされ。痛す。肉の一人也。其脈と診ふ。絶方如く有ふ似ら。射て件の散藥を
 中へ揮入れ。溪水と掬て扶下る。主僕力と勸せて。勸る程件の童女ハ稍息出。死さ
 ると。ゆれもの。のひまを。至ね。只得伴當。搭駝せ。其夜歇店。小就て。を創て。知
 る他。が素生と名。と小夏と喚れる。事云云。と。父も亦。継母も。稚弟も。山家。小居ら
 ざる。命。と。頼。い。ん。妻。あ。ら。ま。や。知。ら。ね。も。外。不。親。族。と。も。る。は。眞。愛。身。と。憐。愍。あ。い。後。と
 泣口説れて。俺父の。之。槍。が。思。ひ。あり。尚。見。る。由。あ。ら。ん。秋。と。他。分。護。身。裏。を。檢。査。し。た。ら
 臍。帯。あ。れ。も。父。母。の。名。と。寫。さ。る。餘。は。皇。大。神。宮。の。離。大。麻。と。除。厄。弘。法。大。師。の

御影ありあは至て俺父の跡然とて思ふや。原來那の僧の必大師の化現也。伊勢の御神の擁護もあるべし。を疑は不仁似し。と深念とあり。開が儘の童子と浪速におて。て俺母も告が母も慈善の本性なれ。相憐て乙藝と名づけて。習縫刺何れなる。教導に忘る慈む。恩念の俺女兄より。億禄中も異る。信而二親世と去て後。送言る。まはそが儘ふ乙藝と妻もあつふこと。一五十一と説示せば乙藝の儘小涙を歌め。肌層護の囊と開いて。合出ま臍帯の包紙と拵伸して。やま喃奶々。這紙の永正元年。甲子の冬十一月三日の誕生。袖が臍帯とある。幾文字の御身のみ迹で。ゆるべ。相別。まは五歳の春。生平次奶とと喚一の。實の御名も顔色も。ふありのけん。も首も。況御身の親里の伊勢。大和。秋。知。され。年七八。做。比。開。と。答。を。問。か。か。思。う。あ。け。ん。実。と。告。ま。は。が。實。の。母。親。の。相。別。比。身。故。り。あ。た。開。と。問。ふ。と。秋。と。叱。れ。て。哀。し。が。一。思。ひ。ま。や。父。の。身。と。刺。捐。鍼。の。山。顛。と。死。天。の。山。豪。ふ。れ。め。ひ。と。知。る。過。せ。十。九。年。珠。會。

日のあらはれと。空。憑。と。新。推。る。鎌。倉。也。く。人。の。れ。言。傳。遣。申。斐。る。ま。其。存。亡。の。反。覆。也。世。の。人。と。思。ひ。ぬ。る。奶。々。の。今。も。恙。な。く。過。世。吉。野。の。程。遠。く。ぬ。上。市。の。里。と。か。ま。ま。料。の。名。告。會。也。は。這。秋。に。就。て。亦。最。後。す。た。の。ぬ。比。這。里。小。宿。甘。米。之。人。異。母。も。俺。弟。珠。之。人。に。け。て。送。不。知。る。知。り。も。俱。小。獄。舎。小。敷。糸。れ。身。の。免。れ。て。か。り。來。他。の。單。追。放。の。往。方。も。知。ら。ざる。け。り。現。小。善。惡。の。報。ふ。そ。と。思。ふ。と。不。便。な。ら。か。と。公。承。落。葉。の。泉。做。を。涙。の。聲。耳。の。口。龍。と。現。小。理。の。俺。も。亦。久。後。憑。く。思。ひ。る。芥。柄。の。反。て。短。命。也。死。せ。り。と。穿。其。方。の。異。る。く。環。會。け。秋。に。現。く。夢。の。幻。秋。量。知。ら。れ。ぬ。生。死。の。海。と。山。老。樹。の。櫻。枯。る。枝。小。開。花。の。一。重。疎。八。重。九。歳。の。秋。も。受。屋。主。の。再。生。の。恩。と。忘。れ。ず。慰。め。ら。慰。め。ら。れ。て。送。不。知。る。令。も。令。れ。り。向。上。直。下。高。對。の。肖。る。と。今。心。憑。く。自。身。貌。ま。黒。子。と。現。小。争。れ。ぬ。親。子。の。照。據。鬼。神。不。測。の。再。會。と。俱。小。秋。九。四。郎。も。只。曾。感。嘆。あ。る。け。り。

新局玉石童子訓卷之三上册終

村田

新局玉石童子訓

淨書画工刷人目次

出像畫工

一陽齋後豐國



淨書筆畊

谷金川

正次代稿

離彪新話中本三卷

莊蝶翁再遊外記

この海内翁の舊作山中麻、及雅物、
龍案せらるゝとある冊子、初編近刻
差想共、清胡蝶物語の拾遺、
初編十冊内五冊近刻
故らざる滑棒、
笑余の奇書

開卷驚駭奇俠客傳第五集十冊近刻

この編更、玉石童子訓と名つらる玉石の善悪邪
正の由る素より架空の寓言と久しき童叟婦
子とく續味あると死の管見をせしと獎善の域小
入る裨益ありと云ふるを、
全編五卷分巻十冊を、
全刊刻成所の五冊と發
板、下帙五冊も續けて刊行せしと、
四方の君子
全編皆成の折と候ゆへ、
文溪堂敬白

○家傳神女湯 一包代百洞
○精製奇應丸 大包中包小包共、
○熊胆黒九子 右目、
○婦人分虫の妙薬 右目、
○製衣藥 四谷隠士
弘所江戸元徳町中橋下南側中程 瀧澤氏
たけ氏

作者 澤清右衛門

弘化二年乙巳春正月吉日開板發行

心齋橋筋博労町角

河内屋茂兵衛

心齋橋筋南久太郎町

秋田屋市兵衛

大坂書肆

大傳馬町貳丁目

江戸書肆

丁子屋平兵衛板

